

近代日本におけるカフェーの変遷

村田 瑞穂

はじめに

昭和初期の「エロ・グロ・ナンセンス」の流行の中でも、「エロ」の尖端として挙げられたのが「カフェー」である。昭和初期においてカフェーは流行の尖端とされるほどに増加し、多くの客と女給を集めていた。当時のカフェーは大衆文化の一つであり、社会風俗の一端を担うものであった。

本稿の目的は、カフェーを通し社会風俗を考察することである。特に、昭和初期に問題とされ、現在の研究史の中でも問題となっているカフェーの「エロ」化を念頭において考察する。このことは社会、風俗に出現する「エロ」を考察することにつながり、カフェーの「エロ」とは何かを考える上でも重要である。

従来のカフェー研究では、議論の中心が次の二つの時代に絞られている。

- ① 日本に初めてカフェーの出来た明治末
- ② カフェーが急増した関東大震災後

このうち①については、明治四四（一九一）年に開業したカフェー

ー・プランタン、パウリスタ、ライオンの三軒の客層や雰囲気を中心となって論じられており、他のカフェーについては言及されていない。⁽¹⁾

②の時代のカフェーについては、食事ではなく女給が客の話相手をするのがカフェーの中心となり、女給は「エロ・サービス」を行っていたとされている。「エロ・サービス」は昭和四、五（一九二九、三〇）年の大阪資本のカフェーの東京進出により、一層過激になっていったと指摘されている。⁽²⁾ また、女給を中心とするカフェーと、飲食を中心とする喫茶店が分かれたのもこの頃であることが指摘されている。⁽³⁾

これらの研究では、カフェーが大正期を通じてどのように変化したのか明確になっていない。また、関東大震災後のカフェーがどのような「エロ」化したのが詳細に研究されていない。「エロ・サービス」の実体が明確に提示されていないことも問題である。

以上の点を踏まえ、本稿では、カフェーの誕生期から風俗統制が強化されてくる第二次世界大戦開始前後までの期間を五つに分け、カフェーがどのような営業を行っていたかを考察する。また、それぞれの

窓 時代について、昭和初期に現れた「カフェー」との相違を考える。

史 対象とする地域は、東京で、主たる史料は『讀賣新聞』、石角春之助『銀座解剖図第一篇変遷史』⁽⁴⁾である。

第一期 カフェーの出現

—明治末から大正三年—

日本に「カフェー」と名乗る飲食店ができたのは明治末のことだ。

東京では、明治四四年銀座に、カフェー・プランタン、カフェー・ライオン、カフェー・パウリスタが相次いで開店した。カフェーは、このちも銀座を中心に発展することになる。

プランタンは欧州のカフェーを模して作られ、イタリア料理を提供し、バーの機能も備えていた。⁽⁵⁾プランタンには多くの文化人、知識人が集まった。欧州のカフェーを模して作られたプランタンではあるが、給仕に関しては欧州では常である男性を用いるのではなく、若い女性を用いた。日本のカフェーにおいて、給仕に女性を用いるのはそのはじめからであった。

ライオンは、三〇人ほどの美人が揃いの衣装を着て給仕する、洋食、ビールを出す大衆的な飲食店であった。パウリスタは、ブラジルコーヒーで有名な喫茶店で、軽食も提供していた。このようにカフェーと名乗っていても、提供するものの特徴はそれぞれ異なっていた。

大林宗嗣は、当時の飲食店について、プランタン、ライオン、パウリスタの影響を受け、東京市内に多くのカフェーが作られ、「西洋料理店は殆どカフェーに変わつて了つた」と述べている。⁽⁶⁾これは多くのカフェーが、洋食を提供する飲食店であったことを示している。また、石

角春之助は、カフェーが増加した理由として、一品料理になった「洋食」が大衆的な料理になり、「洋食」を提供する場所としてカフェーが求められたことを挙げている。⁽⁷⁾このように、明治末のカフェーと洋食は切っても切れない関係にあった。

当時の「女給」はどのような存在であったのだろうか。大正二（一九一三）年の『讀賣新聞』では「女給」について次のように述べている。

そして其の品行だが通勤途中迄、カツエ店での監督は出来ぬが店に居る間は帳場や支配人の厳重な監視を受けて居るので比較的非難的は少ない、是でエプロンの少女の輪郭だけは理解が出来る有ろうが先づ女の職業としては良い部類とでも申すべきか⁽⁸⁾（傍線は村田、以下同じ）

この頃、「女給」という言葉は定着しておらず、カフェーで働く女性の給仕たちは「ウエーターレツス」「女ボーイ」⁽⁹⁾などと呼ばれていた。これらの「女給」は、生活のために働いている少女が多く、飲食物の運搬や、注文を取ることのみ従事しており、「先づ女の職業としては良い部類とでも申すべきか」といわれている。つまり、第一期の「女給」たちは、後年の「エロ」とは無縁の存在であった。また、パウリスタなどは給仕に男性を使用しており、カフェーの給仕は必ずしも女性というわけではなかった。⁽¹⁰⁾

第一期のカフェーは、「軽便で清潔な息み場所」⁽¹¹⁾であった。店によって、提供するものに差はあったものの、多くは洋食や洋酒、ビールなどを提供する、飲食を摂ることを目的とした飲食店であった。「女給」たちも「エロ」とは無縁な少女であり、第三期に登場する「カフ

「エー」「女給」とはかけ離れた存在であった。

第二期 普及期

—大正四、五年から関東大震災前—

大正四、五（一九一五、六）年になるとカフェーに変化が現れ始める。

『讀賣新聞』の「身上相談」には、若い女性から、生活に困りカフェーで働こうかと考えている、という相談が寄せられている。新聞にこのような投稿があることから、カフェーで女性が働くことが一般化してきたことが解る。それに対して、記者は「カフェーなど仲々堅い所がないので困る⁽¹²⁾」と答えている。この「堅いところがない」とはどういうことなのだろうか。

石角は、大正四、五年のカフェー・ライオンの女給は、「エロ的」になり、女給たちの年齢も「少女」から「年増女」に変わったと述べている。おそらく、「身上相談」で解答している記者もこの「エロ的」な要素をもって「仲々堅い所がない」といつているのであろう。しかし、石角は、当時のカフェーは洋食を摂ることを目的の一つにしていたと続けており、そのため「エロサービスなどを強要する不心得者は少なかった」と述べている⁽¹³⁾。

『都新聞』では大正七（一九一八）年に、東京に広がったカフェーを「遊散の折の小憩」「時間を約束しての会談」「出先で用事の間を窃んで簡単なる食事を摂る」に適した場所と紹介し、そこで若い女性が働くことが定着していると述べている。同時に、カフェーが抱える問題にも触れ次のように述べている。

この簡単な酒食を売る店の常得意は、若い会社員、中学以上の学生が主なるものだと聞いてゐる。そうした若い人達が、卓を囲み椅子をならべて其處に酒食を摂る、若い婦人が其の間に周旋する、眼と眼は相語り眉と眉は語る、斯くして思慮の未だ定まらざる若い人達は、竜馬の狂ひ心猿の躍ることはなからうか。⁽¹⁴⁾

ここでは主な客層である「若い会社員」「学生」などの若い男性が、カフェーに働く若い女性たちから誘惑を受ける、もしくは誘惑するのではないかとしている。この記事では、私娼対策の目をカフェーの女給にも向けるべきであり、客である若い男性たちを「善き方向」へ向けさせるべきであるとも論じている。ここから、カフェーや女給が問題視されていることがわかる。特に女給が若い男性を誘惑するものであるとして問題視されている。ここにも、石角のいう「エロ的」な傾向があらわれている。

しかし、カフェーが「小憩」や「会談」「簡単な食事」に適した場所であったことも事実である。石角は大正七、八年からの七、八年間を「カフェー普及時代」といい、その時代が「カフェーの於ても、洋食を食ふ時代であつた⁽¹⁵⁾」ことを強調している。第二期には、カフェーにおける「エロ的」な要素は徐々に増していったが、関東大震災前までは、食を摂ることを目的とした店であった。

さらに、大正九（一九二〇）年の新聞では次のように報じられている。

私は或てバーとカフェーとを、混同しようと思うものではない、が日本化せられた此二つのものが、それ自身混同してゐるのだ。イヤ二つ処ではない、バーとカフェーとレストランの三つ

の女となる覚悟には、悲壮な感情さへ流れて居やう。たゞ職業に同化することに依つて、遂には性的危地に身を墮落せしめ、十人に二人か三人の割合に、情話のヒロインとなるのである。その一面の職業婦人的破綻を見て、カフェーの女に私娼行為が多いなど⁽²⁶⁾と、道徳的批判を下して居るが、今日の大勢なのであります。

松崎は、女給が「性的危地に身を墮落」しやすい場所に位置し、女給の「十人に二人か三人の割合に、情話のヒロインとなる」と述べている。この「情話のヒロイン」のなかには「私娼行為」をする女給も含まれるものと考えられる。⁽²⁶⁾このように、実際に売春を行う女給もいた。しかし、そのような女給は少数派であり、基本的に女給のサービスは売春を含まなかった。

このころの女給は「エプロン女給」とも呼ばれ、銘仙の上につけた白いエプロンが女給の象徴であった。このエプロンは、女給があくまでも給仕であることを象徴していたのである。第三期の女給は、立って接客を行い、客の隣に座り込んで話をするということはなかった。

カフェーはあくまで、客が女給と酒を飲む場であった。このような状態の中で、カフェーは年々増加していった。カフェーの増加はカフェーの一般化を招き、新聞や雑誌の報道なども通じてカフェーは一般に知られるようになった。しかし、カフェーへの関心が強まるのは昭和四年のことである。

昭和四年、警視庁警視総監に丸山鶴吉が就任する。丸山は、警視庁保安部長時代に私娼取締を行ったことで有名であり、就任の当初からカフェーへの対策が注目された。実際に丸山が警視総監就任した直後には、警視庁管下のカフェー、バーに対する調査が行われ、昭和四年

九月には「カフェー」「バー」等取締要項」が警視庁管下の各所に通牒された。このカフェーに対する取締問題を通じて新聞、雑誌等ではカフェーの報道を増やしていく。昭和四年一二月の「婦人公論」では、その状況について「カフェーやバーが今日ほど社会の問題として、やかましく取扱われてゐる時代は、今までにない」と述べられてい⁽²⁷⁾。このように、昭和四年には、カフェーが広く認識されることになった。

今日、認識されている昭和初期のカフェーの形は、この第三期に形成された。カフェーは、食より酒、酒より女を目的とする場所に変化したのである。女給の売春問題なども騒がれたが、実際は多くの女給が売春とは関係がなかった。しかし、カフェーの店内に於いては誘惑するものとして女給が存在していたことも確かである。

第四期 飽和期

—昭和五年から昭和八年前期—

カフェーの数が最も多くなるのが、この第四期である。この時代は、数が増えるに従って、サービスが過剰になっていった。このことから、カフェーの数は需要に対して既に飽和状態になっていたのだと考えられる。この他、サービスが過剰になった背景には、「エロ・ドロ・ナンセンス」の流行や、大阪のカフェーが東京に進出して来たことなどが挙げられる。

昭和五（一九三〇）年には、「エロ・ドロ・ナンセンス」が流行した。この影響を受け新聞・雑誌でも「エロ」「エロ・ドロ」などの単語が使われはじめ、カフェーはエロの尖端として報じられた。カフェー

窓
ーにおける女給のサービスが「エロ・サービス」と呼ばれるのはこの頃からである。

史
大阪のカフェー進出が、東京のカフェーに影響を与えたもの昭和五年からであった。大阪のカフェーは東京でも大流行し多くの客を集めた。そのことは当時の新聞で度々報じられている。⁽²⁸⁾大阪のカフェーは店の大きさと、女給の多さ、そして「エロ・サービス」で多くの客を吸収した。⁽²⁹⁾

第四期のカフェーは女給が客の話し相手となり、酒を提供するといふ点で基本的に第三期のカフェーと変わらない。しかし、女給のサービスの「エロ」ぶりには変化があらわれた。大阪のカフェーでは、女給からエプロンをととり、女給を客の隣に座らせて接待させた。これにより客と女給の距離は近くなり、互いにより誘惑しやすくなり、誘惑されやすくなったのである。この接待方法は、従来の東京のカフェーにも影響をあたえ、東京のカフェーもこれに倣うようになった。⁽³⁰⁾

大阪カフェーの進出は、東京でのカフェーの競争を更に激化させた。特に中小カフェーでは「エロ」を売りにして客を集める傾向が強くなる。⁽³¹⁾それらの中小カフェーは具体的にどのようなサービスにでたのである。永井荷風は当時の銀座の小カフェーに就いて次のように書き残している。

京橋河岸通のとある露地にバラックのカップフェーあり。女給外に出で通行の人をとらへ寄り添ひて私語する様甚いぶかしければ、入りて見るに、女四、五人あり。参円にて淫を売るといふ。五円

出せば二階の一室に案内して女二、三人裸体になり客の望むがままにいかなる事をもするといふ。⁽³²⁾

ここから「参円にて淫を売る」など、売春や売春まがいの行為をしていたことがわかる。また、銀座の一角には「銀座玉の井」と呼ばれる場所が登場した。⁽³³⁾この時期に、こういった記事が書かれていることから、カフェーの風俗が極端に乱れたのは第四期だと言うことができる。

第三期で、女と酒を飲む場所となったカフェーは、第四期の大阪カフェーの進出、「エロ・グロ・ナンセンス」の流行などによって女給によるエロ・サービスが加えられた。

第五期 衰退期

—昭和八年後期から第二次世界大戦開始に向けて—

全盛を極めたカフェーは、徐々に数を減らし始める。警視庁保安課が昭和八（一九三三）年下半期に行った娯楽機関の調査を、『東京朝日新聞』は次のように報じている。

来る年も来る年も増加の途をたどつたカフェー、バーも漸く飽和状態に達してか、この下半期には珍しくも激減、（中略）昨年二月に施行されたやかましい取締規則によるものだろうが、客が飽きたためと当局では見てゐる。⁽³⁴⁾

このように、昭和八年後半からカフェーの数は減少していった。原因の一つは史料にもあるように「客が飽きた」ということもあるだろう。時代は、カフェーに変わって喫茶店の流行を見るようになっていた。

また、「やかましい取締規則」も減少の原因の一つである。昭和六年末以降カフェーやダンスホールに関わる取締規則が警視庁からたび

たが出されている。これは、満州事変、国際連盟の脱退の影響を受けた政府の風俗統制との関わりが大きい。昭和八年の「特殊飲食店取締規則」以降も女給に対する禁酒令が昭和一〇年に、昭和十四年一月からは女給の数が制限された。

この時期のカフェー、女給の様子はどのようなものであったのか。第五期のカフェーは、数が減少したということからも、第四期のような飽和状態にはなかった。また、取締、統制の強化をうけ第四期のような「エロ」報道は少なくなった。実際にも、第四期のような「エロ」さはなかった。この背景には、カフェー間の競争に一通りの決着が付いていたことも影響している。

先に述べたように、第五期は喫茶店流行の時代であった。昭和一年の『中外商業新聞』で喫茶店は「サービスも女給さんほど濃厚でない」店で、「簡単な飲み物」で時間を過ごす場所として紹介され、第三期の「喫茶店」からあまり変化のないものとして描かれている。⁽³⁵⁾しかし、「新興喫茶」なるものが現れ、喫茶店の大半を占めるようになった昭和一三年の『中央公論』次のような記事が寄せられている。

新興喫茶は特殊飲食店規則によるものであるから、純喫茶異なり従業婦サアヴィスが容認されてゐる。純喫茶なら、従業婦女子は珈琲紅茶の類を運び、一寸した数言の用件的会話は差支ないが、佇立してゐなければならぬ。しかるに新興喫茶では客の傍らに腰をおろして対話の対象となる。⁽³⁶⁾

この記事から、「新興喫茶」が、カフェーやバーを取り締まるのと同じ「特殊飲食店取締規則」にそう形で営業していたことがわかる。カフェーと同じように若い女性の接待を受けることができ、しかもそ

れが安価で楽しめることもあって、カフェーの客は喫茶店に流れていた。

取締の強化によって、数を減少させていったカフェーは、喫茶店の流行によってさらに数を減らすこととなった。

おわりに

以上、近代における日本のカフェーの変遷を追った。純粹に飲食を摂る場所から「エロ」の尖端と呼ばれるようになるまで、カフェーは少しずつ変化していった。

明治末に、コーヒーや紅茶、洋食や洋酒、ビールなどを提供する飲食店であったカフェーは、時代が下るにつれて、飲食物よりもそこで働く女給たちの存在感が増していった。しかし、関東大震災が起こるまでは、あくまで飲食を摂る店として存在していた。

関東大震災後、都市が急激に復興していく中でカフェーのあり方も変化していく。酒やコーヒーを飲み、洋食を食う場所から、酒を飲み、食事をしながら女給との会話を楽しむ、もしくは女給との会話を楽しみながら酒を飲む場所に变化したのである。この、カフェーに更に「エロ」味加わったのは、エロ・グロ・ナンセンスの流行、大阪カフェーの東京進出が起こる昭和五年のことである。

「エロ」の尖端とされ、町のいたる所に姿を見ることになったカフェーであったが、昭和八年の後半からは減少し始める。これに、特殊喫茶店の増加もあいまってカフェーは衰退していった。

関東大震災後の急激に復興していった東京は、同時に大衆化を受け入れていった。勿論、震災前から文化、生活、風俗の大衆化は進んで

窓

いたのだらうが、その勢いは関東大震災からの復興を受けて増していった。震災後にみえるカフェーの変化もそこに起因している。

第一期において、カフェーが数を増やした原因の一つに洋食の大衆化が挙げられるように、カフェーは常に大衆の意図を汲んで発展していった。第三期以降の大衆の増加と共に安価で、簡単に異性と関わりを持てる場所への変化や、「エロ・グロ・ナンセンス」の流行とともにカフェーの「エロ」化が急激に進んだことも当然の流れと言える。カフェーは常に大衆に求められる形で変化していった。そのカフェーが社会風俗の一端を担っていたという事実は、大衆文化の広がり、そして成長を示している。

註

(1) 初田亨『カフェーと喫茶店—モダン都市のたまり場』INAX、一九九三年

馬場伸彦『カフェという疑似西洋体験』『文学史を読みかえる』三インパクト出版、一九九五年

なお、本稿では本文中に引用する史料については常用漢字に改めた。人名、史料名については、史料中のまま表記する。

(2) 前掲、馬場

永井良和「解説近代都市文化と「大阪カフェーの東征」」(『カフェー考現学』柏書房、二〇〇四年)

(3) 前掲、初田

(4) 石角春之助『銀座解剖図第一編変遷史』丸の内出版、昭和九年(『近代庶民生活誌第二巻盛り場・裏町』三一書房、一九八四年所収)

(5) 大林宗嗣『女給生活の新研究』巖松堂書店、昭和七年(『近代婦人間題名著選集社会問題編第三巻』日本図書センター、一九八三年復刻)

(6) 前掲、大林

(7) 前掲、石角

(8) 『讀賣新聞』大正二年一月三〇日

(9) 前掲、大林

(10) 『讀賣新聞』大正二年一月三〇日には、女子給仕を使用しているカフェーを紹介しているところに、「パウリスターがボーイである」とある。

(11) 『讀賣新聞』大正三年五月一三日

(12) 『讀賣新聞』大正四年九月一七日

(13) 前掲、石角

(14) 『都新聞』大正七年六月七日

(15) 前掲、石角

(16) 『讀賣新聞』大正九年七月三〇日

(17) 前同

(18) 前掲、石角

(19) 『讀賣新聞』大正一四年一月一四日

(20) 前同

(21) 中央職業紹介事務所編『東京大阪両市に於ける職業婦人調査(女給)』大正一五年(『労働事情調査資料集第二巻婦人労働事情』青史社、一九九六年所収)では、「調査範囲」の項で「女給と言ふ言葉に依つて代表されるものは相当範囲の広いものであるけれども、本調査では所謂カフェー女給を中心として、それに西洋料理、喫茶店などに働くものをも加えたる意味の近代的エプロン女給に制限して調査することとした。」と述べ、カフェーと喫茶店を分けている。

(22) 『讀賣新聞』大正一四年一月一四日

(23) 『讀賣新聞』大正一四年六月九日

(24) 『讀賣新聞』大正一四年八月七日

(25) 松崎天民『銀座』銀ぶらガイド社、昭和二年(筑摩書房、二〇〇二年復刻)

(26) 大阪で、カフェー、女給の調査をしていた、村島歸之や、大林も同様の見解を見せている。

前掲、大林

村島歸之『歡樂の王宮 カフェー』文化生活研究会、昭和四年(『カ

- フェー考現学』柏書房、二〇〇四年所収)
- (27) 岡田三郎「女給を妻にして 妻に與う」『婦人公論』昭和四年一二月
- (28) 『讀賣新聞』昭和五年一〇月二〇では、大阪カフェー「美人座」「日輪」の繁盛ぶりが報じられている。
- (29) 田崎宣義氏は東京のカフェーを一変させた理由として、客一人に、女給一人の濃厚なエロ・サービス、資本力にものをいわせた大規模さと、それをペイする大衆性、の二つをあげている。
- 田崎宣義「都市文化と国民意識」『講座日本史』東京大学出版会、一九八五年
- (30) 前掲、大林
- (31) 『讀賣新聞』昭和六年二月二三日
- (32) 永井荷風『断腸亭日乗』(新版 断腸亭日乗)第三卷、岩波書店、二〇〇一年)
- (33) 安藤更正『銀座細見』春陽堂、昭和六年(中央公論社、一九七七年復刻)
- (34) 『東京朝日新聞』昭和九年三月一三日「昨年二月に施行されたやかましい取締規則」とは昭和八年一月に警視庁が通牒した「特殊飲食店取締規則」のことである。
- (35) 『中外商業新聞』昭和十一年四月二日
- (36) 新居格「新興喫茶―純喫茶 風俗時評として」『中央公論』昭和十三年六月